②国際協力・交流等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
文化財の保存修復に関する国際共同研究 〔第１期〕東南アジア諸国の屋外文化財の現地環境と劣化状況調査ならびに保存対策に関する調査研究（セ 03）	国際文化財保存修復協力センター	55
敦煌莫高窟壁画の保存修復研究―日中共同研究―（修 02）	修復技術部	56
中国文化財保存修復に関する調査・研究 （龍門石窟の保存修復に関する調査研究）（セ 04）	国際文化財保存修復協力センター	57
中国陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する研究（セ 30）	国際文化財保存修復協力センター	58
中南米諸国文化財保存修復協力事業 ―第１期　パナマ歴史地区の保存修復協力事業―（セ 01）	国際文化財保存修復協力センター	59
在外日本古美術品保存修復協力事業（修 05）	修復技術部	60
文化財保護に関する日独学術交流（保 04）	保存科学部	61
北米の文化財保存研究機関との国際研究交流（保 05）	保存科学部	62
アジア文化財保存セミナーの実施（セ 06）	国際文化財保存修復協力センター	63
西アジア諸国文化遺産保存修復協力事業（セ 33）	国際文化財保存修復協力センター	64

文化財の保存修復に関する国際共同研究
［第１期］東南アジア諸国の屋外文化財の現地環境と劣化状況調査ならびに保存対策に関する調査研究

（②セ03-04-4/5）

目　　的

タイ、カンボジア、ベトナム等東南アジア諸国の遺跡の保存技術向上をめざし、もって世界の文化遺産の保存に貢献することを目的とするもので、タイ国スコータイ遺跡を中心的研究サイトとするタイ国政府芸術総局との共同研究、およびカンボジア国アンコール遺跡群のタ・ネイ遺跡を研究サイトとするカンボジア政府アンコール・シェムリアップ地域保護管理機構（APSARA）との共同研究を行っている。また、ベトナムの遺跡の調査を開始した。

成　　果

カンボジアのアンコール遺跡群の保存修復プロジェクトについては、今年度は作業の効率化と精度向上を見通して気象計測システムをリニューアルした。装置はいずれも順調に稼働しており、データが蓄積されている。今後データを解析し、保存対策の策定に役立てる予定である。

日・タイ共同研究として、アユタヤ遺跡、スコータイ遺跡をフィールドとした調査研究を行っている。アユタヤ遺跡のラチャブラナ寺院、スコータイ遺跡のスリサワイ寺院とスリチュム寺院における環境計測調査を継続して行っており、2003（平成 15）年 12 月～2004（平成 16）年 12 月のデータを解析してデータ集を作成した。またスリチュム寺院大仏の保存修復処置後の経過観察と今後の保存計画策定のための調査研究を行っており、ミニチュアモデルを使った現地シミュレーション実験を進めている。

2004（平成 16）年 12 月には、バンコクにおいて、これまでの共同研究成果をまとめる研究報告会を開催した。日本側からは６件の発表を行い、その他にタイ側から９件の発表があり、総勢 66 名の参加を得て 2 日間の討議が行われた。

ベトナムのチャンパの遺跡であるミソン遺跡の劣化と保存修復に関する国際共同研究を開始し、今年度は、遺跡の劣化原因究明のために、気象観測システムを設置した。今後定期的にデータを回収し、保存対策の策定に貢献する予定である。

研究組織

○青木　繁夫、朽津　信明、二神　葉子、稲葉　信子、岡田　　健、関　　博充、野口　英雄、宗田　好史、友田　正彦（以上、国際文化財保存修復協力センター）、石崎　武志（保存科学部）、内田　昭人（修復技術部）

ミソン遺跡（ベトナム）における気象観測システムの設置

敦煌莫高窟壁画の保存修復研究ー日中共同研究ー（②修 02-04-4/5）

目　的

敦煌莫高窟壁画の保存修復技術の開発を目的として共同研究を行っている。第 53 窟をフィールドとして修復履歴管理システムの開発、壁画剥落止め材料の開発、壁画彩色技法の光学的調査方法の開発、修復用語集の編集などの調査研究を進めている。

概　要

第 4 期共同研究における実施項目は、①壁画修復履歴管理システムの運用、②壁画修復材料の試験施工と改良、③光学的方法による壁画彩色技法の調査方法に関する研究、④第 53 窟壁画修復の実施などである。

平成 16 年度は、敦煌研究院・ゲティ保存研究所主催の国際シンポジウムに参加した。オルソ画像を用いた壁画修復履歴管理システム、光学的手法を用いた新しい彩色技法分析手法の概要について発表を行い、敦煌学研究者との議論等研究交流を行った。また、2004（平成 16）年 8 月に行った第 53 窟壁画の修復共同作業では、昨年度の現地試験の結果をもとに、水を溶媒としアルカリ処理ゼラチンの西壁龕基壇部への注入を行う等の壁面強化を行った。今後は、修復作業の進展に伴う塩類析出が問題となっており、壁面内塩分に関する測定、脱塩処理手法の開発が求められる。

敦煌側研究者の受け入れについては、11 月 16 日～12 月 28 日までの 43 日間、保護研究所文博館員の陳港泉氏を招へいし、第 53 窟壁画内塩類分析と日本における文化財修復の実際を見学するなど研修を行った。陳氏の専門分野は応用化学であり、壁画土壌内塩類の分析では非常に高度な議論を行うことができ、日中双方にとって将来的に有効な成果をあげることができた。また、日本における文化財修復の研修では、日中両国の修復に関する考え方の共通点・差異について、修復現場見学時の質疑応答やその後の議論より模索し、今後の共同研究にとって有効な成果となった。

＜学術雑誌等への掲載論文数＞　2 件

Aoki Shigeo, Masuda Katsuhiro, Matsuoka Ryoji and Su Bomin, “Development of an Image-based Information Management System for the Restoration of Wall Paintings”, Conservation of Ancient Sites of the Silk Road: Second International Conference on the Conservation of Grotto Sites, Dunhuang Academy, China, 04.6.30

Ide Seinosuke, Shirono Seiji, Yukio Lippit and Su Bomin, “The Determination of Wall Paintings Based on Photographic Images taken from Mogao Caves 53 and 260”, Conservation of Ancient Sites of the Silk Road: Second International Conference on the Conservation of Grotto Sites, Dunhuang Academy, China, 04.7.2

＜学術雑誌等への掲載論文数＞　1 件

谷口　陽子、森井　順之、陳　港泉、蘇　伯民　「敦煌莫高窟 53 窟仏龕周辺における土壁中の可溶性塩類について」『保存科学』44　pp.127-134　05.3

＜報告書＞　1 件

『敦煌莫高窟壁画の保存修復研究報告書』　80p.　東京文化財研究所　05.3

研究組織

○加藤　　寛、森井　順之（以上、修復技術部）、中野　照男、勝木言一郎（以上、美術部）、城野　誠治、皿井　　舞（以上、協力調整官ー情報調整室）、青木　繁夫、岡田　　健、谷口　陽子（以上、国際文化財保存修復協力センター）

中国文化財保存修復に関する調査・研究
（龍門石窟の保存修復に関する調査研究）（②セ 04-04-4/5）

目　的

中国龍門石窟の保存に協力するため、龍門石窟研究院との緊密なパートナーシップを構築し、龍門石窟の現状を詳細に調査し、保存修復の方法についての研究と具体的な処置、人材の養成など、多角的で実効的な成果をあげようとするのが、本研究の目的である。

成　果

1）人材養成

長期研修：龍門石窟研究院から毎年1名、保護研究室の研究員を受け入れ、長期研修を実施している。4人目の人材として2004（平成16）年4月から国際協力機構（JICA）の資金援助を受けて研修を開始した李心堅氏が、9カ月間の日程を終了し1月末に無事帰国した。研修では、鎌倉市の丘陵部に現存する鎌倉時代から南北朝時代の洞窟、通称“やぐら群”を対象に、洞窟本体と周辺に存在する亀裂の挙動を観察し、洞窟の破損・劣化の測定、定量化について有効な成果をあげた。その成果は日本応用地質学会平成16年度研究発表会（10月28日、新潟）および『保存科学』44号で発表された。

短期研修：毎年の個別のテーマによって、短期研修も実施している。平成16年度は11月24日から12月8日までの2週間、龍門石窟研究院保護センター范子龍研究員を招へいし、石造物の保存修復における充填注入の材料および技法に関する研修を行った。研修期間中は、逗子市名越切通し、福島県滝根町入水三十三観音磨崖仏等石造文化財の保存修復現場、鴻池組研究所等を視察したほか、「陝西唐代陵墓石彫像保護修理事業」に関連して招へいした西安文物保護修復センターの斉揚副主任、馬濤総工程師らと研究交流をはかった。

2）石窟劣化状況観察記録作成の研究

洞窟および彫刻、表面彩色等の劣化状況に関する記録作成方法について、2005（平成 17）年 3 月 7 日、8 日の日程で龍門石窟研究院保護センターの研究員と共同研究を行った。中国・日本の経験を龍門石窟保護に活かすという主旨から、現地へ中国文物研究所センター文物保護科技センター（北京）の陳青主任を洛陽へ招へいし、共同で作業を行った。龍門石窟保護のためのインベントリモデル構築へ向けて、着実な成果をあげた。

研究組織

○岡田　　健、青木　繁夫、朽津　信明、関　　博充、谷口　陽子（以上、国際文化財保存修復協力センター）、石崎　武志（保存科学部）、中野　照男（美術部）、城野　誠治（協力調整官ー情報調整室）

鴻池組研究所（つくば市）の視察

龍門石窟敬善寺洞における劣化状況調査

中国陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する研究（②セ 30-04-1/4）

目　的

財団法人文化財保護・芸術研究助成財団と陝西省文物局の合意により平成 16 年度から 4 年計画で実施される陝西唐代陵墓石彫像保護修理事業に日本側専門機関として参加し、西安文物保護修復センターとの共同により、唐時代の乾陵、橋陵、順陵に附属する石彫像の保存修理に関して、科学的研究と保存修理作業を行うと共に、石彫像保存地区の保存計画策定の研究を行う。

成　果

1）　考古学的、美術史学的現地調査

平成 16 年度は西安文物保護修復センター、陝西省考古研究所、西北大学文博学院が担当して、順陵に関する現存石彫像の考古調査、測量、撮影、部分発掘調査を実施し、その成果をまとめた。また、東京文化財研究所が参加して 2004（平成 16）年 5 月に陝西省所在の興寧陵、崇陵、7 月に昭陵、永康陵、献陵、莊陵、端陵、11 月に河南省所在の恭陵の唐代石彫像について関連調査を実施した。

2）　石彫像の劣化状況に関する調査と研究交流

2004（平成16）年5月、石彫の劣化状況について東京文化財研究所が参加して順陵、乾陵を視察し、共同研究開始のための基礎調査を行った。2005（平成17）年3月、乾陵の視察と研究交流を行った。

3）環境観測装置の設置

2005（平成17）年3月、乾陵に温湿度・風向・風速・降雨量・石彫像表面温度に関する観測装置を設置した。

4）中国側研究者の来日研究

保存調査班：2004（平成16）年11月24日から12月8日の日程で西安文物保護修復センター斉揚副主任、同馬濤総工程師を招へいし、東京文化財研究所および関連研究機関、石造文化財保存修復現場等を視察調査して意見を交換し、今後の研究交流のための基礎作業を行った。

考古調査班：2005（平成17）年3月14日から27日の日程で、西安文物保護修復センター范培松研究員、陝西省考古研究所隋唐研究室張建林主任、同張在明研究員を招へいし、考古学および文化財学に関する関連調査を実施するとともに、中国における石造文化財保存に関する所内勉強会を開き、意見交換を行った。

研究組織

○岡田　　健、青木　繁夫、朽津　信明、関　　博充、谷口　陽子（以上、国際文化財保存修復協力センター）

乾陵における劣化状況調査

順陵の発掘調査によって発見された“華表”の頭部

中南米諸国文化財保存協力事業
―第１期　パナマの歴史地区の保存修復協力事業―（②セ 01-04-4/5）

目　　的

中南米諸国には、マヤ文明やアステカ文明の遺跡やスペイン植民地時代の中世都市など、世界的にみて価値の高い文化財が多く残されている。一方、これらの国々の遺跡や歴史的建造物は、木造・石造・レンガ造などであり、その多くは虫害、風化、劣化などによって文化財的価値が失われる危機に瀕している。東京文化財研究所は、これまでは主にアジアの文化遺産を中心に国際協力を実施し成果をあげているが、本事業においては、パナマ政府からの協力依頼を契機に、中南米諸国との研究協力を推進しようとするものである。

中南米諸国の専門家と協力して文化財保存修復に関して研究を行うことは、これまでとは異なった地域における経験を積む機会であり、研究の進展と普遍化に役立つとともに、相手国の専門家養成と専門知識及び技術の移転に関して効果的な国際貢献ができると期待される。

両国の協力事業をより円滑かつ広汎なものとするために、2002（平成14）年2月、東京文化財研究所とパナマ文化庁は研究及び交流の合意書を取り交わしている。

成　　果

1）パナマ人専門家の招へい：パナマの非営利組織 World Monuments Fund（WMF）の専門家1人を、日本における歴史都市保存、建造物保存事業、地域住民の活動等についての調査研究を目的として、2004（平成16）年9月25日から11月1日の日程で招へいした。滞在期間中、萩市で開催した国際ワークショップへの出席と同市内重要伝統的建造物群の視察、NPO京都町家再生研究会の活動・唐津市重要文化財高取家住宅の修理現場・福岡市重要文化財善導寺の修理現場・長崎市内重要文化財建造物の修理現場等の視察、およびアジア文化財保存セミナーへのオブザーバー参加などを行い、所定の成果を収めて帰国した。

2）都市保存に関する国際ワークショップ「歴史地区における木造民家の保存、および地域の再生―萩市における町並み保存と活用に学ぶ―」の開催：パナマ市の歴史地区カスコ・アンティグオの保存に貢献するため、同時に通常交流の少ないアジアと中南米との情報交換をはかることを目的として、9月29日、30日の日程で、日本、パナマ、メキシコ、フィリピンの専門家が参加し、歴史都市保存に関する国際ワークショップを、山口県萩市との共催で実施した。今回は、歴史地区に残る木造民家の保存と、これを活用した地域の再生について各国が報告を行うとともに、日本の事例として400年の歴史を持つ城下町萩市に残る重要伝統的建造物群を視察した。

研究組織

○岡田　　健、稲葉　信子、野口　英雄、宗田　好史、大竹　秀実（以上、国際文化財保存修復協力センター）

パナマ市カスコ・アンティグオの町並み

萩市における町並み保存の視察

在外日本古美術品保存修復協力事業（②修 05-04-4/5）

目　　的

海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と共同で、保存修復に関連する研究を行う事業である。平成 3 年度から絵画を対象に事業を進めてきたが、平成 9 年度から工芸品など欧米の修復技術で修復の困難な分野にも協力対象を拡げた。

この事業により修復した作品の公開によって、わが国の修復技術に対する理解が深まり交流が促進されている。本事業の立案のために、欧米の美術館、博物館にて作品調査のほかに修復技術に関する討議を行い、併せて輸送手続きに関する協議を行っている。当研究所は修理内容の検討、修理作品の写真記録の作成および整理・保存、輸送手続きに責任を持って当たっている。

この修復協力事業によって修理された作品の公開展示回数が増すことは当然であるが、修復協力事業が契機となって所蔵の日本古美術品に対する関心が新たに高まりつつあり、欧米諸国では日本古美術品を所蔵する博物館の間でネットワークが構築されつつある。さらに、文化財保存の専門家の交流も促進され、わが国の文化財修復技術の普及と理解に対し効果をあげている。

概　　要

平成 16 年度は、継続修理を含む絵画 5 件、工芸品 4 件の作品を修復した。

＜絵画＞

1)「大政威徳天縁起絵巻」　6 巻　ギメ美術館　（2 年計画の 1 年目）

2）勝川春草筆「春駒図」　1 面　キヨソネ東洋美術館

3）葛飾北斎筆「大原女図」　1 面　キヨソネ東洋美術館

4)「金剛童子像」　1 面　ケルン東洋美術館

5)「諸尊集会図」　1 面　ケルン東洋美術館

＜工芸品＞

1)「和歌浦蒔絵十種香箱」　ピーボディ・エセックス博物館

2)「猩々漆絵油壺」　クリーブランド美術館

3)「黒韋腰取威筋兜」　メトロポリタン美術館　（2 年計画の 1 年目）

4)「耕作図蒔絵料紙箱」　ロスアンジェルス・カウンティ美術館　（2 年計画の 1 年目）

平成 16 年度、絵画の事前調査ではシアトル美術館 6 点、ロイヤルオンタリオ美術館 17 点、リートベルク美術館 22 点、ナープルステク博物館 4 点、プラハ国立美術館 11 点の調査を行った。また、工芸品の事前調査ではツウィンガー陶磁器博物館（ドレスデン国立博物館内）1 点、ピルニッツ宮殿 1 点、クラコフ国立博物館 89 点、ワルシャワ国立博物館 56 点、フランクフルト工芸美術館 39 点の調査を行った。

平成 15 年度に修復した絵画、工芸品の修復状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。また、この事業の庶務を管理部、修復に関する調査・修復業務・報告書作成を修復技術部と美術部、写真記録の作成および整理業務を情報調整室がそれぞれ担当した。

＜調査・研究報告書等刊行数＞　1 件

『在外日本古美術品保存修復協力事業修理報告書　平成 16 年度（絵画／工芸品）』　212p　東京文化財研究所　05.3

研究組織

○加藤　　寛、加藤　雅人（以上、修復技術部）、渡邉　仁之（管理部）、綿田　　稔、城野　誠治（以上、協力調整官一情報調整室）、中野　照男、鈴木　廣之、勝木言一郎、津田　徹英、塩谷　　純（以上、美術部）、青木　繁夫、稲葉　信子（以上、国際文化財保存修復協力センター）

文化財保護に関する日独学術交流（②保 04-04-4/5）

目　　的

日本とドイツとの間では、1974（昭和 49）年に科学技術に関する学術交流のための協定書が調印され、医学・物理学などを中心に日独学術交流が行われてきたが、1990（平成 2）年の第 13 回日独科学技術合同交流委員会においてドイツ側から「文化財保護に関する日独学術交流」の提案があり、1992（平成 4）年から交流が開始された。本研究は日本とドイツ両国の文化財保護に関する知識や経験を交換し、それぞれの国の文化財保護に資することを目的としている。

概　　要

平成 15 年度よりドレスデン工科大学との間で「石造文化財、石造建造物の保存」に関する共同研究を行っている。2004（平成 16）年には、8 月に保存科学部の犬塚がドレスデン工科大学を訪問し、多孔質体中の水分移動、熱移動に関するシミュレーション手法の共同研究を行った。また、９月に、保存科学部の石崎と北海道立地質研究所の高見がドレスデン工科大学を訪問した。この際に、「石造文化財や歴史的レンガ建造物の劣化機構と保存対策」に関する研究会を開催した。

2004（平成 16）年 11 月には、ドレスデン工科大学建築環境研究所の研究員のグルネワルド氏、プラーゲ氏を招へいして、「建築材料の水分特性、調湿特性の研究」に関する研究会を開催した。建築材料中の水分移動は、歴史的建造物の劣化において大きな影響を与える。この建築材料中の水分移動を評価する上で、建材の水分特性を測定することは重要である。ここでは、多孔質体の水分特性測定法に関する日本の基準とドイツの基準について研究発表があり、試験法の違いや測定値の利用方法などについて活発な意見交換がなされた。

2005（平成 17）年 2 月には、ドレスデン工科大学建築環境研究所の研究員のフェヒナー氏を招へいし、土壁中の水分移動に関するシミュレーションを共同で行った。これらの多孔質体中の水分移動に関する研究は、高松塚古墳のような、地盤中の水分移動の評価、予測に関しても重要であると考えられる。

研究組織

○石崎　武志、犬塚　将英、佐野　千絵、早川　泰弘（以上、保存科学部）、三浦　定俊（協力調整官）、
高見　雅三（北海道立地質研究所）

東京文化財研究所で開催した研究会での討論の様子

北米の文化財保存研究機関との国際研究交流（②保 05-04-4/5）

目　的

北米には、世界を代表する文化財の研究機関が所在する。その例として、アメリカにはフリア・サックラー美術館が所属するスミソニアン研究機構やゲティ保存研究所があり、カナダにはカナダ保存研究所（CCI）などがある。それらの研究者と、文化財保存に関する実りある国際研究交流を行うことを目的とする。

概　要

平成 16 年度はこれまでに引き続き、カナダ保存研究所（CCI）との国際研究交流を行った。CCI（1972 年設立、カナダ文化財局）はカナダ国内の文化財保存のために設立された研究所であるが、保存環境に関する研究を進めるだけではなく、北米を中心に世界中の博物館、美術館等に対して保存のための助言や指導を行っている。

ここ 10 年ほどの間に、世界の博物館、美術館等で、地球環境や人の健康を守るため大規模燻蒸を避けようとする気運が高まり、害虫の被害を未然に防ぐ予防対策や、大規模燻蒸以外の代替殺虫法の普及が進められている。わが国も 2004（平成 16）年末に臭化メチル生産停止となり、代替システムへの移行に東京文化財研究所でも全力で取り組んでいる。カナダではすでに燻蒸以外の代替殺虫法へ移行しており、代替法やシステムの研究、運用で学ぶべき点が多くあり、平成 16 年度は CCI よりトム・ストラング氏を招へいし、共同で IPM ワークショップを行った。

この共同ワークショップは、博物館美術館等での生物被害対策の方法である IPM の方法論を具体的に学ぶ場を国内博物館等に提供する専門研修であるだけではなく、博物館美術館等の実状に沿って各国の専門研究者が IPM 研修方法を共同で組み立てていくことを目的にした。韓国からの参加者もあり、有意義な研修であった。参加者 23 名。

＜ワークショッププログラム＞

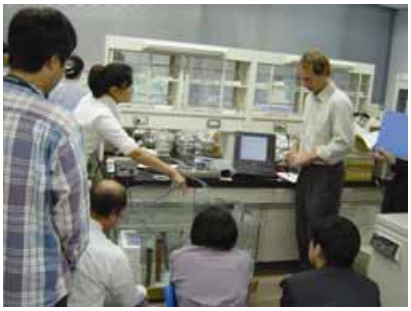
日　時：2004（平成 16）年 10 月 12 日（火）～10 月 14 日（木）

会　場：東京文化財研究所地下会議室　（14 日ケーススタディは、国立歴史民俗博物館の協力で現地開催）

１日目	午前	オリエンテーション、グループづくり
		IPM の骨組みと具体的方法（講義、討議）（CCI 担当者）
	午後	主要な文化財害虫の紹介と加害の特徴（講義）（東文研担当者）
		主要な文化財害虫の同定（グループ実習）
		生物対策上の問題点の把握と今後の進め方のアイデアづくり（実習、討議）
２日目	午前	生物被害の目視による調査方法と記録のとり方（講義）（CCI 担当者）
		トラップによる調査の方法と記録のとり方（講義）（CCI 担当者）
	午後	さまざまな殺虫処理法（講義）（東文研担当者）
		殺虫処理法の実習　（窒素処理、二酸化炭素処理、低温処理、高温処理など実習、討議）
３日目	午前	ケーススタディ（グループ実習）
	午後	IPM のプログラムの作成と討議（グループ実習）

研究組織

○木川　りか、佐野　千絵、石崎　武志、犬塚　将英、吉田　直人（以上、保存科学部）、三浦　定俊（協力調整官）



IPM **ワークショップの様子**

アジア文化財保存セミナーの実施（②セ 06-04-4/5）

目　　的

アジア文化財保存セミナーは、アジアの文化財保存に関する種々の問題について報告と協議を行い、日本及びアジア各国間の相互理解を深め、国際協力の推進に貢献することを目的として開催されている会議である。平成 13 年度からは５か年計画で、日本を含むアジア 9 カ国から参加国と参加者を固定し、「アジア諸国の文化財保護制度に関する研究―変化し発展する文化遺産の役割」を総合テーマに、各国における文化遺産保護の制度とその運用について様々な角度から共同研究を行ってきている。

現在世界に広がっている文化財保護制度が 19 世紀にヨーロッパで始まって１世紀半になる。文化の多様性への尊重から、今改めて世界の各地域において文化遺産の保存とは何か、そして文化遺産の保存が社会に果たす役割とは何かについて考え直すことが求められている。平成 13 年度セミナーでは、文化財保護に関する法律の内容とその成り立ちについて、平成 14 年度セミナーでは、機構・体制とその運用の状況について、平成 15 年度セミナーでは信仰または宗教、民族または民俗、経済の問題について各国から報告があった。これを受けた今回のセミナーでは、最終年度となる次年度のまとめに向けて「文化遺産の将来像と保護制度」のテーマのもとに、今後文化遺産はどのような環境におかれていくかという未来予測をしつつ、その変化に応じた保護制度のあり方について、各国の報告を聞き、討論を行った。

概　　要

日　　時：2004（平成 16）年 10 月 25 日～10 月 29 日
会　　場：東京文化財研究所　会議室
出席者数：15 名
テーマ：文化遺産の将来像と保護制度

日　　程

10 月 25 日　セミナー第 1 日（東京文化財研究所）
開会式　挨拶　東京文化財研究所　鈴木規夫
趣旨説明　東京文化財研究所　稲葉信子
「未来に生きつづける文化遺産―その将来像：日本の場合」　東京文化財研究所　岡田健
「韓国の文化遺産保護制度と将来像の批判的再評価」　韓国啓明大学校人文大学韓国文化情報学科　金権九
「中国の文化遺産保存制度修正についての試案」　中国精華大学建築学院建築歴史及文物建築保護研究所　呂舟

10 月 26 日　セミナー第 2 日（東京文化財研究所）
「ベトナムにおける文化遺産の将来像と保護制度」　ベトナム文化情報省文化遺産局　グエン・クォック・フン
「文化遺産の将来像と保護制度―タイの事例」　タイ芸術総局遺跡記念物部　ピチャヤ・ブーンピノン
「文化遺産の将来像と保護制度―フィリピンの事例」　フィリピン国立歴史研究所　エメリタ・V. アルモサーラ
「文化遺産の将来像と保護制度の基本的要素」　イラン文化財観光機構　アデル・ファルハンギ・シャベスタリ

10 月 27 日　セミナー第 3 日（東京文化財研究所）
「聖なる遺産と社会」　インド世界記念物基金プログラムアドバイザー　アミタ・ベイ
「スリランカにおける文化財保存の「未来」に関するいくつかの意見」
スリランカ・ケラニア大学　ジャガス・ウィーラシンハ
総合討議　閉会式

10 月 28 日～29 日　スタディツアー（和歌山県）

研究組織

○稲葉　信子、青木　繁夫、岡田　　健、山内　和也、朽津　信明、二神　葉子、関　　博充、大竹　秀実、野口　英雄、宗田　好史（以上、国際文化財保存修復協力センター）

西アジア諸国文化遺産保存修復協力事業（②セ 33-04）

２．イラク

1）イラク文化財専門家研修事業

人材育成及び技術移転の一環として、2004（平成 16）年 10 月 29 日から 12 月 18 日にかけてバグダードのイラク国立博物館修復専門家 2 名を招へいし、保存・修復に関する専門知識および技術全般、とくに青銅製品及び粘土板文書保存修復技術及びそれに関連する専門的知識の研修を行った。

イラクは、メソポタミア文明発祥の地であり、世界的に重要な考古学遺跡が多く存在するのみならず、バグダードをはじめとする国立博物館には膨大な数の遺跡から発掘された貴重な遺物も大量に保管されている。残念ながら、紛争中及び紛争後の混乱の中で、博物館の収蔵品が破壊され、また、重要な遺跡も盗掘の被害を受けてしまった。しかるに、現時点では、こうした文化財を保護し、調査する専門家のみならず、また、最新の文化財修復技術に関する知識や経験が不足している。そこで、本事業は、イラク人専門家の人材を育成し、イラク人自身による文化財復興を支援することを目的としている。

研究組織

○青木　繁夫、稲葉　信子、山内　和也、朽津　信明、前田　耕作、岩井　俊平、谷口　陽子、西山　伸一、関　　博充（以上、国際文化財保存修復センター）、田辺　征夫、巽　淳一郎、肥塚　隆保、高妻　洋成、森本　　晋、降幡　順子、岡村　道雄、井上　和人、窪寺　　茂（以上、奈良文化財研究所）、佐藤　一郎、北田　正弘、木島　隆康、桐野　文良、建石　　徹（以上、東京藝術大学）、足立　　守、中村　俊夫、宮治　昭（以上、名古屋大学）